



平安海澄巻九

リ 5
2004
9



門 刊
2004
卷



長門本卷之九

法皇福原行幸此事

附

遷都乃舊例

福原構新都事

三井寺此衆徒被召捕事

重衡三井寺を焼拂事

後濃大寺左大將舊都見給附有川上公侍從事

清盛入道愚夢前表事

石橋山早打注進此事

葵太子丹七事

不郵相廣辻氏
藏書記

文覚伴三國流り事

前代入道...

...

...

...

...

...

...



平家物語卷之九

法皇福原行幸は幸并遷都の舊例

治承四年六月言俄太政入道とて此のよき福原へ移

幸有る都り河を言りて中宮一院新院拵政夜を

始とて公の殿上人子も参りて三日と崩(言を俄と

引付けられ方同位を七人上下とも河日てさせられたるの

と云り河(言帝皇れおあかある)一本ふは后中法に同

樂にて中宮に沛免のと平大納言時忠々の小方典侍

ありと中宮参りありけり是は先條のたれ也と人言ふ

向へりけり言池大納言頼盛の家を皇孫と定て平上り
たうせり言四の頼り言永の志を承て正二位言なり
右大臣無實此の子右大将言通神 此なり
法皇言平原に三別ある板敷を作りて面にも言志
すかりて南に堂けて口一ツ向けいかに此言いらせり言いつ
そよいせり此の言橋の言流と此言いり法皇言頼成を
此言いりいりくても言いり言いり言いり言いり言いり
と此言いり言いり言いり言いり言いり言いり言いり
武士言いり此の言種言いり言いり言いり言いり言いり

此後此武士此いりくても言いり言いり言いり言いり
十人言いり言いり言いり言いり言いり言いり言いり
言いり言いり言いり言いり言いり言いり言いり
此の言いり言いり言いり言いり言いり言いり言いり
今此の言いり言いり言いり言いり言いり言いり言いり
言いり言いり言いり言いり言いり言いり言いり
言いり言いり言いり言いり言いり言いり言いり
神武天皇ハ天神七代地神五代三代の言いり言いり言いり
代言いり言いり言いり言いり言いり言いり言いり

日向國宮崎郡を皇王のむすむすをのたまひ奉り九子
とりつちのこのひのひのひ十月東征して豊葦原の
中津國をよこすつ大和國畝傍山をてんで帝都を
建て榎原の地を切耕いて宮室を造りけいれす
もち榎原の宮とよまひしとをいひて代々帝皇の時
都をうつりしるま三十度か余り六十度たり神武天皇の
景行天皇迄十二代大和の國を治りし宮つちしてう
川りかこしやうし成務天皇元年大和國近江國
志の都にみやこをうつりし

仲哀天皇二の九月長門國をばきて豊浦の郡
かこしやん

仁徳天皇元年に新津國難波に都を建て高津宮
に住りし

履中大皇二年大和國を掃りて十市郡の都を建て
正天皇元年大和國を河内國とすのり紫羅の宮に
かこしやん

允恭天皇四十二年河内國を又大和國に改て遠明日
香乃ををのたまひ

安康天皇三年大和國泊瀬朝倉に宮を立遷移天皇
廿年山城國つたふりの事して十二年おん一基の落し
郡を任り

宣化天皇元年にたを大和國歸て檜曲の盧入所
宮居志りて欽明天皇より皇極天皇迄七代ハ大和
國歸りて他國つたりの事も遷天
皇大化元年持統の國をさうつたれて豊後へ遷りた
つ京明天皇二のになを大和國歸て飛鳥の墨本の
事も遷りて天智天皇六年ハ又を江國志賀郡よりつりて

大化の宮をつた天武天皇元年ハ大和國歸て墨本
は南宮に任りて遷を所たの清見原の事と持統
天皇の光仁天皇より六代ハ大和國大京長乃京に
おしつた桓武天皇の御宇延暦二の十月ハ山城國
長岡よりつりて十の此京にすつ程と同十一
の正月ハ大納言坂原小黒丸を議左大臣吉代に受
大僧都賢孫等を侍りて嘗國の内高野郡に大
村をみ築らるに西人地をわけてつく地の左青龍右白虎
前朱雀後玄武神お應の地也とわけけりて右宮郡

おろしん加茂大明神につくされて同十三の長岡
京が此平安城の都であつたが都を他處うつすれ
す帝皇の二十二代早雲の百餘歳也世うつすか
くの都のりけ此京をためて度家かひてあつし
て東代すし山の京を他處うつすれ此事にして
大臣公の諸人の博士と文人にちを先しつので長久
あつた板とて木とハ又の人形を作りて甲冑をた
せつたを持分て王城をすりたして北山は岩に西よ
向てきてありつみたり拉車塚とて平家の天下に

車いて此兵うかふらんとてあつた此志うせめんとて
此塚は都をとりし柳原の天皇とす平家の先祖にて
おろしん先祖は柳原はかた志つて早うたたる
都を此の中末をうけてしつる此の亂れを他處うつ
す事ん治りし此京をた字つて平安城といふ事か
にすしつとあけりしつてはつて控さつて就中主
上も三皇のみか以て平家の外孫とすおろしん
君もつて控さつたりしは是の國の名ひす大責を
て平家都の都をこのす山地にすしつて(此すいお)

と昔おのへりるに今世は夫をいするに事このりも
宇家もてなりしを都を他國へうつし當帝
をお移しもて大政入居る孫を位につけ申す高倉
此文の皇子うちもてかつを切実向書後をかうけ
我むこを清友り孫政ふかし申す大臣公の及上人
北面は中らうといひるを或ふかし或ふ移す悪逆の
何れにりつておのれ都うのり斗ふれかかす
に山姥と人上げの源家天皇山時大團圓に都を他
國へうつしんとしり人せん祀かけたくふそ

すもせのいふた一天七君万葉七主たのりうのりえ
ゆゑに都をたやする凡人の身とて思ふんしてら
けんおむけむたやまのりためてたりつらお安城
りし王城徳子の社く四方に光をゆまけ靈驗お勝
は守く上下を存をのり言世万民のけひるお安
をたにたよりけり是をすてりん事志西の仙神非
をうけりしやに海に黎民背向くしりま光や吉
よ云把人を有若己志祀神の有疾度禍お移しといひ
此京の西方も大將軍より有方角すては申すか

勅文をのぞくは中上陸陽將士安信李弘勅狀云本條云
若大將軍王相不論遠近同の忌避諸事然るに遷
都先例不避之歟埴武天皇延暦十三年十月廿日
長岡の京を遷都於高野京今年為久しき當王お
萬乙不被避し是依舊不論方忌次大將軍、禁忌
程及王お方就延暦、佳例被遷都雖為大將軍
之方何一有其暉哉といひ是を削て何人十もるに
延暦は遷都は出づいたのい有といひか、凡四都を
すべし、凡おわて方々の禁忌は、何れもいひ

何れもまだ、四方たつと、何れりけるを、人ひ、を、の
一、新都、供を、七人、の中に、四都、を、し、ら、に、つ、け
け

百とせをよ、り、し、は、過、り、に、お、た、の、里、の、何、れ、を、お、ん
咲、の、花、乃、都、を、し、り、す、と、凡、吹、尔、の、子、(其、阿、子、) 凡

福原構新都事

六月九、日、京、新、都、の、す、け、の、と、其、廟、一、福、原、と
い、ふ、處、北、に、と、神、明、政、を、は、れ、土、田、意、所、の、ま、千、代、の
い、ぬ、二、も、り、産、の、本、京、二、あ、け、の、本、雲、井、は、し、す、右、引、の、龍

南を此巻めと海よりいり沿河島山脈のありあり
船をん帆のつくりのつれにんすの馳走の上右大
将實定守おにも右大將通親中より、頭右大將通親
人左大將隆と名聞へし河内守先引丈をえてその
杏原西野に宮城の池を定られ多一條の妻茶子社祈
つり花五條が世の若かりけり土御宗相中將通親三
條大政の意を向けて十二の通川をたつ大國をかゝり
しりれ我朝に五條を河の宿のつれをえり此に
るはれたは書言も力及えて歸りけりねん屋中にて

有(た)又あかふのにて有(た)ふと公令せん此のけ礼も
事りしつらん内裡をつら(た)し後定有(た)五條大
納言國綱国防国をたつてつらをせら(た)り太政入
事(た)り六月廿二日事け(た)有(た)八月十日棟上(た)有(た)
と定(た)りしりかの大納言大福長者(た)つら(た)さん
る(た)左右に及(た)る(た)も(た)い(た)つて(た)民(た)れ(た)ら(た)い(た)る(た)り(た)は(た)は
あ(た)り(た)り(た)ら(た)大(た)堂(た)舎(た)を(た)い(た)お(た)り(た)世(た)の(た)乱(た)は(た)遷(た)者(た)
造(た)内(た)裡(た)海(た)城(た)つ(た)た(た)り(た)て(た)み(た)た(た)る(た)古(た)積(た)云(た)林(た)氣(た)起(た)花
章(た)甚(た)白(た)黎(た)民(た)散(た)茶(た)真(た)阿(た)房(た)殿(た)お(た)天(た)下(た)乱(た)も(た)い(た)り

又帝範云茅茨不剪採椽不削舟車不飾衣服
無文もといり唐の太宗のてんたうをつらうの
貴をいひみてつる館幸かううてううは昔むくかを衣の
本をおろやみみりけるすす波は小新こ新しんなるんんりして郡
河かれををににああくく砂されれらら家かににはは川くわああ小せう草そうおおひ
てて危あ上うににああるるわわりりししままかかししたた詠えい維い危あ會え歎たんすす年
のの苦く氣き志しんん此こ誓せいとと持もててりり

三井寺に氣徒被る捕車

廿一日園城寺乃多んけい法親王とて後白川院の

卿子也天王寺が法親王とて免られた中して檢非違使
つれて西僧をのりし院宜云園城寺忌僧小遣小月
朝家忽企謀及仍門徒僧徒以下皆兼停止公請解却
見任并細德兼又末寺庄園及彼寺僧新國諸國
宰使早の令收云但於有限寺用者爲國司河決が
寺家處司任其用途莫令違悖垣例佛寺無呂
圓惠法親王宣令停止兼帶天王寺檢校職と
此このの礼れいたりる上じやう總そう僧そう正せい席せき光こう權けん僧そう正せい覺かく智ち法はふ印いん大だい僧そう都と
定ぢやう慧えい德とく慶けい實じつ慶けい以い衆しゆ推すい少せう僧そう都と真ま圓えん豪こう禪ぜん眞しん智ち良りやう智ち

既兼度旨權律師道既學增勝成行智行辨以上見任
解却法印公經初曉度實法眼實勝道隆道俊并實印
偏圓源執親忠法橋良俊忠祐良覺并大僧共覺禮并
權僧正公既并權僧都位以上二十人准次二會講師ハ
圓全障融禮并公胤以上今停殊僧總十八人講也のら
化友のは化處領を没官一て同使廳候を付て水火の
責に及て西僧をあとの房覺一乘院僧正をと飛龍辨
官景高朝臣承の實度常陸法印をと上總判官忠綱
朝臣兼の行采中納言法印をと將士判官章貞兼の

能度真如院法印をと和泉判官仲賴兼の真日花僧都
をと源大夫判官季貞兼の覺智美濃僧正をと指
津判官盛澄うけりの勝度藏人法橋をとと祇園將士
大夫判官基廣をとと公既并宰相僧正をと出羽判官
光長をとと覺禎僧正をと齊藤判官友實をとと兼
智明王院僧都をと新志明基うけりと實印をとと大臣
法眼をとと任府生經廣うけりと觀志中納言法眼をとと行曉
大藏法眼をとと紀府生兼原兼執

重衡三井寺を統攝ふ支

去丑月高倉に宮扶持しきり事には依り三井寺を攻めし
と少治の死と大氣發く大津の南北乃浦に於いて死す
のりて多勢なるなり 結構なるを 平將重衛朝臣を大
將軍にして一千余騎の軍會を率いて三井寺(桑向
)を襲ひてせられた戦いなり 何事にも是に言ふ人
討たにり 少治の死と大氣發く事にして 桑向の重衛
朝臣寺中より入るに是を燒掛ふ南北に中三院
此内燒盡す堂舎塔廟神社佛閣本院勢尾坊常
喜院真如院桂園院等 皇院王堂普賢堂青龍院大

宝院今總所宝殿 同洋殿亦護法善神社祖教待和
尚本坊 同中身影像 日本号等 鐘樓七ヶ一階大門 大金別 八間四
面大講堂三重宝塔一基阿弥陀堂同宝藏山王宝殿
是一ヶ四面迴廊五輪院十二間大坊三院各別灌頂
堂各一ヶ但金堂中六鏡法りけり其外の僧坊六百ヶ
大津の在家千五百奈奈地を掛早佛像二千奈奈於
密西宗章疏大師のりり 唐本一切經九千奈
卷忽灰燼と必以又燒死する氣の執人既り千五人
とせしつゝ凡そ密偵史小滅して細益文に跡のり

途而令還時恒例仙事畢品圖惠法親王宜令停止
天王寺檢校職とせ加はれたり

後徳大寺左大將四都を見給ふ事

附 待宵小侍従此事

斯都とまりしを思ふ舊都とよしくありしゆく
めで小政よと辻とに堀をけりゆりてを引て車な
とよりとたくもあられたた中不車にりり人り道を
たて 堀のたのしみは後かく田舎ふきりり小ありの
心ちしてあまう一人の家をみかあらちつた代にみ

ふく糸つとせ 賀茂川のりり川小舟てきたするむかし
政乃みおんれと何すちる糸よりたのそまきのあはれり
果て虫の音はみきりりむちあちりりいとて庭草
深くして夜くけり跡とせ向りり心やそくはしら
はとつた事か 新都のたのけとりをみれ事にきりり
この馬小乗衣冠布衣なるたのけのあわくむらじをた
り都のてふにちまらにゆりすてはひたなひたる物のあ
あとの秋もあつたなりけは心ゆる人々るるくの月をみ
源氏大將の政を道次がゆりり 浦つとよるりまりしゆの

瀬戸をおく後、志高の月、人より都乃かとの志
く、下、廣澤、以、人、を、此、中、に、後、徳、大、寺、左、大、將、實、定、志
把、都、を、志、く、八、月、十、日、中、の、比、や、入、道、の、宿、而、後、母、を
て、今、一、渡、^夜四、都、の、月、を、舟、に、こ、よ、と、ん、一、の、宿、に、た、い、ま、を
路、を、中、と、し、ま、い、け、れ、と、入、道、の、り、心、を、け、ま、か、と、言、し
く、い、れ、ま、し、り、有、け、れ、と、實、定、院、に、お、ち、を、得、て、を、上、れ、ら、る
香、羽、田、の、お、り、の、秋、の、夕、光、に、お、そ、う、ま、を、や、ま、ら、ぬ、う、ち、お、し
乃、香、や、そ、の、身、を、し、み、病、も、後、を、向、ら、せ、ひ、て、袂、を、あ、り
斗、也、大、將、だ、の、初、大、宮、に、お、あ、す、く、せ、り、い、れ、ら、い、の、小、侍、徒、を

此、を、あ、い、け、ら、の、の、小、侍、徒、と、や、ら、し、の、の、つ、わ、ひ、を、や、ら、ら、る
倉、院、山、位、の、時、山、職、向、つ、て、供、侍、り、ま、し、う、す、あ、し、た、ら、う、ハ、假
志、ま、い、り、ち、ん、と、あ、い、い、し、有、見、時、め、ら、ら、す

君、代、と、こ、方、の、軍、人、教、を、い、て、す、り、お、ふ、や、貴、員、の、表
と、後、い、り、と、ん、と、その、時、の、り、ん、と、や、り、侍、徒、に、ま、か、し、れ、い、り
け、ら、と、後、う、と、皇、太、后、に、奉、ら、勢、北、月、の、あ、あ、さ、り
け、れ、と、小、侍、徒、と、お、い、れ、ら、ら、る、乃、母、と、ハ、香、羽、院、の、山、内、小、侍、大
を、の、つ、わ、ひ、と、し、ま、ら、柳、か、ら、る、小、あ、り、て、山、内、を、す、み、う、れ
く、い、と、あ、い、れ、ら、あ、す、ら、る、住、居、に、て、お、い、け、ら、向、ら、時

小大生のつれづれつとあふまひりて七つあがり我が身のことい
らふ事終つてのち中なる七つあふまひりたる時下向せんとして
七夜もやく一の十二のせし言んの中へ鬼病兼陰のい
なりたるをおりい出し

南堂まよしつとれみあ(世の中へ住むい) 増かす病終

とよみまよしつとれみあ(世の中へ住むい) 増かす病終
まよしつとれみあ(世の中へ住むい) 増かす病終
父母は南堂まよしつとれみあ(世の中へ住むい) 増かす病終
ありおゆえんをいひありたる此片九月廿日午のち南面

乃ちの地は暮暮夜をいひつとれみあ(世の中へ住むい) 増かす病終
を唐唐先をみ

いよの子をまよしつとれみあ(世の中へ住むい) 増かす病終
母を子をいたれてえりて

いよのちをまよしつとれみあ(世の中へ住むい) 増かす病終
すれいりけるちのありたるこの小侍候すまよしつとれみあ(世の中へ住むい) 増かす病終
ける大将もはつとれみあ(世の中へ住むい) 増かす病終
いよのちをまよしつとれみあ(世の中へ住むい) 増かす病終
心ちしてよのちのこをまよしつとれみあ(世の中へ住むい) 増かす病終

侍従がうしろをわらひつてけし

侍従乃文しく鐘のきけはのゝあけの鳥とりののら

と中たりけり車を牽くまゝに上様も侍従
と並のまはれる大將はまゝい官せぬ想川をたせ
たれ内分母の声してはたや此程よりたふのきかぬ
まひりより二人も彼にせよのふりけいひぬる
とこのあけは山もの人福原が後徳太寺屋の山ま
いりらわしやたれをまてお想川は深のすまていし西あめでの
小川より入るせむといひしを今も内へ入る大將西

おりてしまひりたり侍従も小川しまひりいひまひりせむ
をえくみてせ入るぬる後ろ之敷かくまはれをらぬまひり
くらみ中てたたわたり大將たひいけり此程は京都の
はのぬこよとぬいひやまひつれとらたまたたてい由を
おせむけは侍従御ふりおほめまひりものまふあふ
たとい海山をたれりまふと一度のつていぬつら
はらんとねやておたれと大將も実山とらりやた
たれ山並の袖志の斗也とのぬいりまふまておま
まいつふやとせぬのまらんとまひりいれと月を侍に又

ちんそ東のたいよぬいて河をん〜てちり〜ひゆんは
はてたまひりて〜を帯り〜とゆるけれ侍送まり
て此り〜を交用〜るれ河かのつ〜ゆれ〜との血氣を
也大将けり〜志を〜ちり〜を〜て南原を〜り
表〜を〜り〜れ〜る〜あ〜は秋風樂と〜を〜三返のた〜
は琵琶を〜り〜あ〜せり〜ひ〜ち〜ち〜を〜出れ〜と〜ち〜子〜を〜
ハ大指月の光と〜の〜と〜り〜ま〜し〜た〜を〜せ〜ひ〜ち〜ち〜て社原
氏の字活を〜に〜と〜も〜そ〜くの〜交の〜は娘秋の谷砂を〜し〜
つ〜琵琶を〜を〜〜て夜ひす〜の〜心〜を〜か〜は〜の〜ひ〜ひ〜ふ

八月十六夜わたるの月を清いひかをたつや思ふれんをち
してまのひひけちたの夜乃月のありのけいよはまはあ
か〜の〜を〜れ〜けれ折志り〜ふ〜る〜初夜の声かのみおとつ
れ書あゑ麻の足あゑむ〜の声〜い〜〜あ〜る〜時〜何れを
思ふれ〜の〜と〜〜り〜れ〜る〜や〜け〜れ〜や〜に大指を志
や〜を〜り〜す〜〜ひ〜ひ〜つ〜けて樂二三拍は〜り〜る
詩をえい〜ひ〜ける

霜草欲枯土思苦風枝未定鳥栖難〜や京都の何れ
竹けるを大指い〜ら〜につ〜り〜て〜を〜れ〜る〜京都

を来りしれは向さわの京とつれもそ月のかと環かて秋
風此み身に入とおくく二三日くもれけれと
大宮をけしめさして侍従の女房うち袖を志不
らぬらかりりにあつたの由上をれと志をくく山道な人
すうんとおかしめけれれより山道鳥もつはあり志乃
めかしめけれれと大將の女房と志をくく山道な人
しち山道志をかしめさして志をくく山道な人
た小女をむめいなりすして侍従の心中あやとありし
志をくく山道な人

うしゆへにれ之すん絶しそふの文小すます山道な
ひある藏人をたして侍従の川をけりてけりやまで出た
りけりやまで出た
やけり何事をいひてうけりてうけりてうけりて
藏人兼て侍従あたるりける氣に鳥かあり是と
大將の女房と志をくく山道な人

のれを君のいけん^侍の志はけしめいりや
とやれ侍従をかしく山道な人
すしと社又のいりつらあ、の^侍の志は
うれ

藏人六田の系の邊までおつたすむせたり大将藏人を侍
はるいふま嫌しりよ思しるる乳をいふと尋つり
藏人志うしと替中るわりかす神妙ととて持付の
國をりし其の庄をを給るる替れかすて其を藏人を
ととのふ此藏人ともの子れ又や其藏人とも中り

清盛入道西に無少前表之車

其の子れ秋よりたりぬ月日にさ行けれより世と
いすし志つがすれ其福小を本れたらあちしして
つひよ心あをたうちしとも有るる家承の人と三位友

をばしめちりてすむと夢をのしりあはれのおるは
有けれを神社仙寺に祈りも志れり也其地此地入道福
系にすしりし系ふし其の端あよりおかく其有る或夜
七夢に入道みりいりあはすし早とありん地して急ん日や
たしてすしりしけりまはれ^{サレウ}く二出て東西の移り何の其
志ける初と二ツ有るる後にと十九と二十百萬後ととる千五
と云敷を志るんつかにみあて其はるこれらる集居て上
ありかすしと下ありなるるうしと上ありて其はるい
飛けるはて其の後其河すりて其(し)より面をわくして合

をばたしおらちて花のなる紫うらまの面に目つつくまける
入るも肩志と山札をいふなりたると人此目くをす
根は平やすいたのせすをさふ中して花のなる中ゆりて
一回に舌を上てそのと笑いと舌唇雪をかきしとく清笑て
後うと泣くもあふ花也さう花のち入る無打すめてむなさと
地して花さしりくも又有と花ささりいりるは八間の紫に
をかす程のさしりくつて是も一回有るも又入ると目く
うへし是もいふみかけてうせはよりから事さるをみるい
を後とつ花は物さるはらん花は出来たにける花はれ乃ち

京極源中納言雅頼令内侍青侍あり夜は無多みりるハ
いづつとも花の紫をらにりくまはす大裏は内侍紙官
とむらうしは紫の衣冠正しくまはる上臈を並居りて
御定有るは身の上より上臈のはけり事とす
此は清盛入る京極の紫の鈕をらにりて伊豆
の流人あゝ無断佐頼朝もくもは侍有るもすは此方
に居りせむいたりる上臈是を文取て作有けりむ此
鈕をら免しかへして頼朝に給へん頼朝一初の後我を
治て孫にていものに孫をたよりを侍りしはる回く

幡の本地應神天皇すてまうすやと此の改かす
やん三福よの頼朝一初ひとの後のち我われもあて孫まごそい者ものふ
たふへ此由このよしゆられつらうらうら藤原氏の先祖春日
大明神あきのみかみすまうす藤原氏不出いづあせめてかの奴やつをい清盛
よ今いま去さるゝあゆとりすせめいつらうらうらふ家いへの民神
いつらうら大明神あきのみかみ是こゝ也なりとあしむる者ものといきせれ井いふけし
やくをりちてまいらせたりつらうら今いまのまゝ改かす高神たかのかみの
此こゝの二住ふたぢ言こと取と訪と此こゝ大明神あきのみかみすまうすあせれ三福よは有ある事こと
をたれくもよしてまはは青侍あおざむらいもあすためておせれ

此こゝの余あまりに丑神うしのかみをかせたあしむる青侍あおざむらいつゝもれ
て後主あとのぬしの雅頼みやのりは此こゝ事をことをりたすにやれ雅頼みやのり
ゆめく此こゝ事こと披露ひらすゝた入いる此こゝ事をことを聞きひいては
汝おれもいふあゆめをのみんすらんといふをよめいひはれた京
中に此こゝ事こと聞きて人のあしむる合あはれにた、此こゝ事ことは府ふを中
合あけら入いるも此こゝ事こと聞きひ越こ中ちゆう中ちゆう盛せい次じを言ことての
あひるゝ源中納言げんちゆうなごんごんごん雅頼みやのりはもとあゆらんりの入いる由よしに
事ことをよはくゆえまはらうを兼あはれ是こゝを給たまへはく
兼ありはくしと中ちゆう捕とらはれはくし聞きひしとあはれ

此ら盛況にて雅頼のりしく居向ひたる雅頼此事をた
かめし青侍をよみて此れいなるはけしむるを志めし
つる甲斐なく此事披露して汝をめく人望もせし
くからぬをみんすらんはれも沙故より多くた見えす
つらく此方よりうせよと誓ひぬるも侍の是を兼よ
しなる愛少に都此外に越中入部兼雅頼
此許に居向く入るはれいつる事を有せずし中れ雅頼
誓ひ返すにのしあやめて兼此者あるも誓後世にわたり
此のつらむいぬん約束をり志すを宣ひけり此許
改て入るはれと誓ひぬるも入るはれをいぬるはれ
はれかゝる者たり入るはれを中しんはれあし記はれ
との事をうつはれお地とのありし雅頼のうけに返す
を志すはれも誓ひ世のお誓ひしは入るはれ許に誓
糸くはれ入るはれ中納言を入るはれ出向ひ
対面してはれいけり列のあしとあし誓ひにぬる青
侍の夢を志ししはれいけり誓ひのつら間をくはれん
はれ免に中納言にては是と此は入るはれ中納言
印あしとくはれと誓ひにぬるはれ中納言
はれ帰られける青侍の都を出丹波國のあしを
入るはれ

はれ盛況にて雅頼のりしく居向ひたる雅頼此事をた
かめし青侍をよみて此れいなるはけしむるを志めし
つる甲斐なく此事披露して汝をめく人望もせし
くからぬをみんすらんはれも沙故より多くた見えす
つらく此方よりうせよと誓ひぬるも侍の是を兼よ
しなる愛少に都此外に越中入部兼雅頼
此許に居向く入るはれいつる事を有せずし中れ雅頼
誓ひ返すにのしあやめて兼此者あるも誓後世にわたり
此のつらむいぬん約束をり志すを宣ひけり此許
改て入るはれと誓ひぬるも入るはれをいぬるはれ
はれかゝる者たり入るはれを中しんはれあし記はれ
との事をうつはれお地とのありし雅頼のうけに返す
を志すはれも誓ひ世のお誓ひしは入るはれ許に誓
糸くはれ入るはれ中納言を入るはれ出向ひ
対面してはれいけり列のあしとあし誓ひにぬる青
侍の夢を志ししはれいけり誓ひのつら間をくはれん
はれ免に中納言にては是と此は入るはれ中納言
印あしとくはれと誓ひにぬるはれ中納言
はれ帰られける青侍の都を出丹波國のあしを
入るはれ

り女之尋らる事を用て其れ乃ち其方志を以て
宰相入道十事より此事を用萬人けりを用て其友
うれに徳政を用てとよりに悦むる是を用てして
入道の世を今かかすおんおれいつくすの神と申事
龍王の才三此姫宮胎藏界此岳跡女跡と申事
に俗躰に現くるいける所は越前國企比の
宮と申金剛界此岳跡也いつくすに客人の宮と
申事其の才や是也其の才におれの出れと申事
くく是也胎金兩部此すんくく其れを以てす
藝ハ

俗躰に現くるいける所と申事也と申事此
大明神頼朝の後と我に給いて孫とて其者にたん
んと仰られ其れを以て其れ此後藤原氏の代を
たんとす子の有つれと申事仰られ其れ乃ち頼朝世
を取て日本將軍と申れ其れ一天四海を治るに死り
て代をたより多し頼家實朝頼朝の跡をつれ三代持常
此後義時代を取て有る天子の御代をたより其家
に多し其れを以て車内納言と申れ將軍とて関東に
下り其れ其時に忠於青侍と申り夢也誠也なりと

萬人死にせり

石橋山早歩注進此事

治承四年九月二日大場三郎景親東國早馬をたて
新都への大政入道後につれりて伊三國流人あは右
冬齋佐頼朝一院の院宜高倉に宮令旨のりて
任三國に任人北条四郎時政を先としていぢまらに後
及を企去八月十七日の夜同國の任人相宗別官並隆屋
牧比館におくしてせてか館たるを歩館に火をそきて焼松
比以同廿日北条四郎時政の類を率く相換比士肥一歩

越て土肥土屋岡清のかとよかりて三百余騎此兵を
て比以侍石橋とし一處にたて籠を同國任人大庭
三郎景親武藏お模にま家に思ひまゐりする者友をま
ねりて三百余騎を同廿三日石橋(寺)にて責めりて兵
衛佐無執あるによしていへりにおちりけりて搦山と云
氣に引せりて同廿四日お模國由井比小坪とし氣はて高
山任司重徳の子任司次郎重忠共いれりて兵衛佐の
方人三浦大助義明の子とも三言とれと合戦し高山
任司けちりて化て武藏國へ引退く同廿六日に武藏

此國の住人江戶太郎重長河越太郎重教赤を大将と
して黨者多しに其之を村山丹黨横山孫黨兒
玉黨即ち經喜黨赤をけしめして二千餘人を擁
護して三浦をせし三浦の者も衣笠此城を死して
万一夜討てて矢たぬ村つゝして舟に乘安房國へつゝ
其のめと地中たりける赤家此人は此書を穿て所を死令
り富山庄司重能同舎者小山田家當有重兄才二人
中家小奉ふしてひらるる此書を穿て何事此は詳す
と流人無齋佐吉人として朝敵をせんともり者誰

い記述しつゝくいつの時政中あはれむすれとすく右を西
せりいの人と控中たり赤家たあ死人、無何の事を
刺しり槍もして何れとく討ふ向もやるといひる
か其の者をい富山庄司赤重忠三浦の人と合戦しけるハ
父庄司重能伯父小山田別當有重赤家死たつ死て在赤
大刺替つゝを侍らん為也と兵刺つゝ大政入る此れいひる
世々義朝と信賴にあられて朝敵と成て追討せしれ
うと替つゝ赤家一人のせしれまゝにやゝを頼朝を大納言頼盛
子とやいふゝゝ死罪をいれ流罪となりて其命を生り

化に思をやすれと忽に國家を亂す我子孫の向む
て考をひれ矢をまたらん事仙神のいつる事なく向る
つに天の責はなまらざる頼朝也向中へは
けいりのことおんとくをとりするにせむれを我子孫
に向て頼朝七代迄といつて考を引應たといふこと
多むる時七代を内へ挙げよと入言せり其のい
ふれを以て考を但思をやすれて徳をせよと野心を
向むる事なきの昔りあるく有ら

日本盤余産御宇四年つれものいひし書紀傳七國

名草部高尾村に蜘蛛有り身みちうくは足かくくして
力人に過たり皇化に志すはれは官軍葛城の山を
結むつるがわひ出りす我れが以来野心を向むる事
て朝家を我母たしもの多し則大山皇子大石山丸
大伴真鳥守屋大臣蘇我入麻呂山田右大臣豐成左大臣長
屋大宰少貳廣継惠美押勝井上皇后氷上河内早良太子
仔與親王藤原仲成橋逸智文屋宮田武藏權守平將川
伊豫守藤原純友安部頼良子息厨川次郎太夫貞任同
才島海三郎宗任對馬守源義親惠左府惠右齋川等八

至り追物テ廿余人也此一人として志懐をとけた
る者か、みかたを獄門にかけられたものを山野にあり
北南東北杖東夷西戎新羅高麗百濟國にいささか我
朝をせむ事あり。此世に北に王威も世下にあらけれ上
古にと直旨とやてけれらるる草木にあらはれ天
をかける鳥山に十母をけいりものさし志のいかりを以ては
延喜の時池の汀に居たりけるを山門内祝し藏人を
免しして山の邊取て看れとせ給けれと藏人ともんとては
此丸邊羽つゝあむをしくて既よなんといけるを宜き共

邊まのさたつかにやれと邊飛あらんてとれにあり
山所へ持てまいりたりけれと屋つてもあられたるあり
たゝ邊まの山用なるりけれとも皇威の程を志給しめ
けんのたの也

葉太子丹此車

我朝にりかたす唐國に名んの太子丹といふもの秦に始皇と
軍をすゝ太子丹軍に負て始皇に取あられさす月をさるる
既よ此のいささか置れたり太子丹我身のいささか置たり
る事とさるるさす既よ父母を念心はるるといふと此燕

丹平をりくぬ(本國)歸て恋した父は十小なる
母を今一度子にん二十を過と禁獄境ら化ちや
とやけ化を始皇の世に於て馬に化しり而く成馬此
角此おいたん時本國(う)すしとのぬいれをん丹
んうにす也扱と我恋くとおり父母をりすして
爰しそいたつふ死かんとすもとありいり今又か
くせんうからして恋をりすの天をりたてち明
盛りい徳とんれ世を志化とかしら白化馬と
来りるん丹出礼をり今中の出化んす系山馬

のうらり白くありふけれ我ら應た時や来りんとおい
け系是にりゆをれす馬小角此おいたん時すし
とてゆしめをりれを今(日)出のた乃けりつれをりおの
すしとるせんす妙喜のよの山洋土に請て不孝
此對をりりの孔子孝子と大唐を衣具小ゆわれて孝
とし(章)を六上梵釈四王よりやんちり地祇にたるを
孝養の若をり向とれみはりあをりて涙小母ゆひ
も天原のりん(仙)神にいはり中(明)とる言てりお
はらりけり志(角)おいたり馬危上に出来り始皇

是をみ給ひて^{いづ}給に^いおほ^いて^いるん丹を夫が此加護を此
にて有らばやと申鳥次馬角乃要十のにおと給ひて
英丹を本國へつゝつゝらん様をすらんおほへ本國
へつゝに大河に橋ありかの橋をこつてつゝつゝつゝ
りるん丹是を志るん木の橋をこつてつゝつゝつゝ
河の危つゝつゝん字化をわつせの如くつゝつゝつゝ
着て上りにりみれと千萬と龜出とかろをなつてつゝ
つゝたり是又つゝつゝのつゝ本國へつゝつゝつゝつゝ
才未集り候ひつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ

のりつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
を志つゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
候てつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
をれつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
とつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
をたつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
事つゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
おつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
誓軒とつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ

君親をりし志ん此國也者也皇帝此のめに親をうち兄弟子息
みちを移りされて我身一人跡て此國に近ありたり皇
帝宣あるを四海よりせん志ん此のくにを来らむせん
者には五百斤を令を仰いん志ん此のくにを来らむせん
に申けらむはうとと五百斤に報にらむと也はうと我
うせ始皇帝にも千金の命をうとけんといふ志ん此のくに
をうけおとせ仰りて我父を討親親兄弟のみか始皇帝
にを移りほされて益後此の志ん此のくにを来らむせん
我を海よりせんに始皇帝此命をうとけんといふ志ん

のよりし志ん此のくにを来らむせん此のくにを来らむせん
此國に志ん此のくにを来らむせん十三の志ん此のくにを来らむせん
國に近ありたりに千金をうとけんといふ志ん此のくにを来らむせん
三子ありし志ん此のくにを来らむせん志ん此のくにを来らむせん
りして志ん此のくにを来らむせん始皇帝の内裡に堂に此の
高く作りたりる東西九町南北五丁威陽宮の高は
三十三丈にたつたりは丈七幅をたて大床の下に
是れけりか志ん此のくにを来らむせん志ん此のくにを来らむせん
志ん此のくにを来らむせん志ん此のくにを来らむせん志ん此のくにを来らむせん

と既其積石不規玉函者未知驪龍之氣慨既其
弊邑不觀上邦者未知英雄之氣宿といひければ兵
共靜りにりたるとちこれをつんてりつて何をい者不
十の程此りのと玉をそふれとあんだまのあんだまの龍
乃りてこれの函を志すすのやとて紫木乃虎
任のふひにる能乃女を國の都をみられ給と禮義正
しく事をの志す也と持らんたりけり持の時二人の白
下南殿をくせけりつりてそん名たかき入を皇帝小
中しんしんる氣に官使徳言て上院すにたうしに

下されければけいりりらたか有るに朝敵にたかき入
といとも彼國に臣下也直に進報伝へん事何れか
化らるにとヤルに誠は日比居たり志しくさし保ま朝
敵也十氣持此いそれ何と始皇のつうら取りあはれ
義式も玉解けいりまを川たのそん名たか死て會和
と耻をすしんとなをかりたりしるもりにふさてりり
けいりらん名たかき入をきか始皇是をころんしり
處にそん國に何しつ券突入たる家をけいりあけい
化ら秋にたかき入此氷のとらるる釵に名たかき入てみければ

始皇大いかに力を近りかけい。小衣此袂亦取
布を彼仙秘此袂を取て始皇此世世後亦取ていをく
まふとたは為んは太子丹を六々この中をさうの置は
にりつち口をささかすいものてたりといひて既は袂を
あらんとしゆれを始皇涙をかうしてせめいりかをわき天
此者新業は幸として武王の中の大武王也世うか今あり
朕より女帝ありは共運命のキリ有んはを今あり
り多き舟に有ん但臨終は念にありぬるり。み
海神九重の中は千人を置たり其中に第一は皇座廢

をいみくむれありは此曲を今一度聞ちやとせめいれは
けいおのひけら我をんとの后也始皇此宣るを直小
かうふ事有り。とて此の中りぬ。と何事の有(凡
とおひいて志はゆくゆへたりけは始皇悦いひて南
殿に七尺の屏風をたて、后は習つて琴を引かすはあ
此秘曲を今とわれりと剛あいていゆりも者小心を共
此事。此をたう。さておそり。は七尺の屏風をあら越つ
る。ら此の袂をむとれれんといふ曲をたひひむれむけ
る。けん。あう二人の臣下は後孫のたす。といひけん。あ

曲を聞し詔に始皇と聞知ひて女人の身なれども
に志すひてたけたんを有らる我武王此中の大武王
とて敬たすおのれたる事をいひて 舞盛れん
たち中らにおありて七尺の屏風をりし御すなよつはと我
りひたる時けいひて琴の糸をすまうして福あたる神
はあうちおとけきぬをいひてぬふかけつけいりけれ玉
神にともゆ^たてかの赤洞此柱をか^つし切入にりる夏
附且としあまれ医師の侍醫と云つはを折るぬ前
ゆけらう取のす茶の袋を玉躰りくおけけい甲より皇帝

疵一痕もおをせりし詔に医師代衣要にをたれは時ふ
とつてゆいかりけるも也皇帝三政り我宝祓を扱
てきつ、回光先も志んふをハツきたにゆれは
やのそ志んの國に込軍兵をけしきりて志ん丹をば
御ほりあてけり也乃時白虹目を貫てとふまるとも天
を及ゆけり目をと御りたしと皇帝は世にちあやうりる
つりけきつとぬたかうとさかふけりけれ其天交の言ふ
ゆすといひゆれと世うし此恩をやせれたるよりて志
ん丹をかくわひぬ回すをのり神礼少りゆれは世う

此恩を忘れて頼朝に於て帝家を世々まじり
を乞ふべしと入るるはむいけり

文覚 伴 豆 國、流あり事

無衛佐と永曆元年三月九日流ありしを以て後世に
七春秋を送れり之より後日比ありておきまぬ川
に今之いふは、かゝる世はんをふたにのりんと人
の心をなかりけり後日に理けし高を此文覚のすゑたり
けりと兼りしは乃文覚を在俗の時と遠藤三郎盛を
とけいむける上西門院と氣く、後に武者氣にまじり

け礼と遠藤武者とけいむ、十八年道心あるはと
すを切つ、文覚席とて熊野に籠りておきかむりり
高野粉川山く寺くまじり、都へ歸てたり
を色に任りし言ふは神宮寺をちり、此寺加にて
作らんとし頼をおき、ぬ十方具那をま、の、何るに
ける程小院の御所法住寺へ、かゝりて、由、加有、是、
り、を、や、む、を、お、き、し、由、抱、れ、程、を、奉、者、御、前、
系、ら、す、や、入、人、り、を、り、礼、と、御、前、に、こ、い、を、き、と、は、あ、り、と、て
人、の、中、入、ぬ、に、お、き、と、い、は、て、大、慈、大、悲、に、君、に、て、渡、ら、せ、り、と

に何とて用ゝのゝ入る礼法も人々のことにて然るも此
の礼とありひけり天性不敬の者も有りし者も有る礼
の氣は此の方へ入て此の外の大音者なり
かちてそり人志ん懐をよむ帖云

勸進僧文覚敬白

請蒙殊貴賤道俗助成高雄山聖地

建三二一院今之勤修二世安樂大利子紐狀

夫以真如廣大陀絶ト生佛之微名法性隨忘之雲
厚覆自從身十二因縁之案以降本有心蓮之月光幽而

未顯三徳四昌又之大靈悲哉佛自早没生死流之衢
冥唯耽色耽酒誰謝在性跳旅之迷徒謗人譏法
豈免玲羅獄卒之責矣爰文覚偶拂俗塵ヲ至楞法
衣惡業猶意逞而造干日夜善苗又耳送于瘞干
朝暮痛哉再歸三途之史境永廻ル四生之苦胎ヲ處所
以牟尼之憲法千萬軸之明佛種之因隨縁至誠之法
一而無不在菩提之彼岸故文覚無常之勸川落
淚催上下親類之結縁上呂蓮心ト妙覺王之靈場
也抑高雄者山堆而頭鷲峯山之梢谷靜而敷高

山洞之苦嚴泉咽曳布嶺猿叫遊技人星遠而無
畧塵咫尺好而有信心地形勝尤可崇佛法
天奉加微誰不助成乎風軍聚沙為佛塔
之功德忽感佛因何況於一紙半錢之室
賤乎願建三成就而禁闕風塵御願曰
滿乃至都鄙遠近親疎呈民歌堯舜無
為之化刑椿業再會之咲況聖靈幽儀
前後大小速遊一佛菩提之甚至必觀三身滿
德之月仍勸進修行之趣蓋以如斯

治承三年三月日 文覺敬白

上巻後たりる四條大政大臣按察大納言資賢右馬頭
資時源少將雅賢四位侍從盛美小座よりてすけ賢
々拍子を取て風俗々々をうたひ大政比才ひて
かたか〜〜ら〜急い志むいすけ〜り貞今や〜を〜
いな〜〜目出た〜あり〜後〜を〜れを院無に入らせま
〜〜たりる大座より調子もき〜のひ人〜か上後事無〜の
てれを法皇にあら〜には逆鱗〜〜を〜し〜て
い〜〜多〜い〜り〜けるを安後右馬頭忠宗のたう志〜り〜れ

此と北面の者在大床の上、近て行りぬか、る何れも院中
隆部は云々殿上人御前、座を三つにたらし、丈七尺、
寸分の法師、此すれし、る大力の電、る、腰力をぬいて
そ、このよりたりけ、れと思、る、ぬ、事、そ、の、何れ、と、
い、る、事、を、や、と、て、上、下、み、れ、と、は、何、れ、り、宮内判友、の、朝
を、く、そ、や、上、人、の、御、席、を、お、ら、れ、よ、と、よ、か、め、こ、う、く、れ、
て、人、の、来、り、と、十、九、れ、の、神、宮、寺、小、庄、一、所、と、せ、れ、さ、る、
外、の、知、り、志、の、い、れ、と、仲、徳、院、宣、を、兼、り、て、渡、邊、
の、事、も、や、小、具、せ、と、統、て、下、す、り、け、れ、た、は、何、れ、
國、の、小、家、人、に、近、敷、七、部、す、と、い、ふ、の、上、り、た、り、る、文、を、

具、せ、と、統、て、南、海、乃、は、何、れ、を、せ、り、る、文、を、
帝、の、日、の、天、と、仰、て、折、を、を、か、け、り、と、我、れ、
を、た、り、と、湯、を、を、吞、ん、と、國、の、命、を、全、す、
と、就、成、就、す、と、沈、と、今、の、中、に、今、中、を、
とい、る、三、宝、神、明、の、知、り、た、れ、と、ち、り、ひ、て、飲、
食、を、た、り、と、を、お、け、れ、た、と、入、す、甘、と、り、小、
豆、國、一、と、に、り、け、り、お、る、湯、を、を、吞、ん、と、
お、く、り、た、り、と、ん、と、れ、た、と、一、教、を、を、
て、此、を、り、ら、た、り、と、何、れ、の、け、り、と、
此、事、と、り、也

平家物語卷之九終

